【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和6年度学校評価 結果・学校関係者評価

達成度（評価）	
A	十分達成できている
B	おおむね達成できている
C	やや不十分である
D	不十分である

学校名	佐賀市立東与賀小学校
1 前年度 評価結果の概要	どの学年も立腰をはじめ同じルールの中で取り組みを行うことができました。学力は、昨年度よりも国語・算数において伸びを見取ることができたが、まだ不十分である。思いやりのある行動ができる児童を育成する取り組みを行った成果がアンケートの数値として反映された。何事においてもチームで動くことが慣例化し、一人で抱え込まないで相談できる体制ができた。課題として、学習面は、昨年よりも学力は向上しているが、県平均よりはまだ低い状況にある。学校全体としての教科においても読みと書く、語彙力の強化が必要であることが分かっている。生活面は、現在の取り組みを継続すると共に学校目標にも掲げているふるさとを愛することができる児童を育成するために、保護者や地域と更なる連携を図っていきたい。
2 学校教育目標	ふるさとを愛し、自ら学び、ともに生きていく東よかっ子の育成 －「元気」と「笑顔」あふれる学校－
3 本年度の重点目標	○「ほめる」文化作り ⇒ 自己肯定感の醸成 自己実現へ ○ベクトルそろえ ⇒ 生活・学習規律の徹底 規範意識の醸成 ○働き方改革の推進 ⇒ チーム学校 報連相の徹底 優先課題

4 重点取組内容・成果指標

(1)共通評価項目			中間評価	5 最終評価	主な担当者					
評価項目	重点取組	具体的取組	達成度（評価）	達成度（評価）						
●学力の向上	○全職員による共通理解と共通実践	○学校評価アンケートを実施し、「あなたは学校の勉強がわかりますか」「勉強したことが分かったりできるようになって嬉しかったですか」の項目が児童・教師ともに80%以上	・校内研究を柱として教職員間で取り組みの共有化を図り、組織として学力向上の取り組みの促進を図る。 ・児童や職員にアンケートをとり、取り組み内容を振り返り、改善につなげる。 ・各教科等との関連を意識した「道徳の時間」を実施する。 ・O-Uテストを年2回実施して分析を行い、最初に策定した学級経営案からの改善を図る。 ・児童の役割、出番を作り、「ほかほかカード」を活用することで、児童の自己肯定感を高める。	A	・昨年度の課題を基に国語科の学習を中心に児童も教師もできる喜びを味わうことができる校内研究を進めている。 ・この項目で児童、教師共に90%以上が「分かる」「できる」と感じ、昨年よりも向上している。 ・道徳の時間は、カリキュラムを基に学習を進めると共に適切に内容変更を行って学習を進めている。 ・QUは、Webで2学期からの取組みとなり今後に生かしていきたい。 ・「ほかほかカード」の活用を広げ、誰からも認められる活動とし、児童の自己肯定感を高めるようにしている。	A	・校内研究1年目であるが、学校全体で国語科の取り組みを共有化し、実践を通して結果として表すことができた。 ・中間評価と同じく、児童、教師共に90%以上を、保護者も88%が「分かる」とポジティブに評価している。 ・各学年共にカリキュラムを基に児童の道徳的価値を高めることができた。 ・QUの結果を基に分析を行い、個々の状況を把握した上で、学級としてどう指導するかチームとして考えることができた。 ・「ほかほかカード」は、児童の自己有用感を高める役割を果たしている。この活動を積極的に取り組んでいる児童が70%を超えているが、まだ不十分なので今後も積極的に取り組んでいきたい。	A	・児童の学びに向かう力が育ち、学力向上の成果が出てきていると感じた。その成果がCRTの結果として表れており喜ばしいことである。 ・日常の談話ごと、書くことを大事にして言葉と思考力の基礎を作ったと感じた。	学力向上部 (副)学力向上コーディネーター
	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○毎週の「道徳の時間」の充実を図り、児童の道徳的価値の自覚を深めていく。 ○O-Uテストにおける不満足群を10%以下に減少させる。 ○毎月「ほかほかカード」を書く時間を設け、自分の頑張りを振り返ることができるようにする。	・「ほめる」文化作りを推進し、児童の自己肯定感を高める。 ・「ほかほかカード」の活用を広げ、誰からも認められる活動とし、児童の自己肯定感を高めるようにしている。	B	A	・道徳的な観点から礼儀作法をはじめ規範意識等を含め全体的及び個別的にも指導されており、また褒める文化も定着しており、心豊かな児童として成長していると思う。 ・ほかほかカードの取組みはとても良いと思う。自分へのほかほかカードも自己肯定感を高めることにつながるのではないか。	道徳教育推進教員 人権・同和教育担当 (副)各学年主任			
●心の教育	●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実	○児童の事態把握のため、全校児童・保護者対象のアンケートを実施し、いじめ問題等の早期発見を行う。 ○アンケートを活用して、事前にいじめ防止ができたと感じる職員を85%にする。	いじめに関するアンケートを児童・保護者を対象に年2回行い、実態を把握する。(6月・11月) ・「〇月のこころ」を学年・教師間で共有し、複数の教師で指導にあたる。 ・ほかほか集会などでお互いを思いやる気持ちを育ませる。	B	いじめアンケートの結果から昨年よりもいじめの件数が減少している。いじめに関しては、早期発見を目指して関わり等を行い対策を講じている。 ・毎月実施し、気になる児童のつづきや拾い、指導支援を行っている。	B	いじめアンケートの結果は中間同様減少を続けている。しかし一定数のいじめを覚知しているため、早期に発見し、対応を進めている。 ・各月のアンケートも担任を中心にチームで解決を図った。 ・集金を通して、学校として思いやりのある行動をすべきであることを児童から発信することができた。	A	・居心地の良い学級づくり、児童間の良い関係づくりのために軽く見られがちな係活動や学級会などは効果的と感じる。 ・いじめは日常に潜んでいる。それをどれだけ発見し対応できるかが大切である。今後も早期発見、早期解決を図って欲しい。	生徒指導担当 (副)各学年主任
	●児童生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動。	●「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童生徒80%以上 ●「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした児童生徒80%以上	・授業だけでなく、教育活動全体で、ほかほかカードの取り組みを充実させ、いいところ見つけの充実を図り、児童の自己肯定感を高める取り組みを行う。 ・児童の資質能力を育む授業づくりを目指す。 ・各種体験活動では、児童に活動の見直しと学びの振り返りを行う活動を仕組んだり、将来の夢や目標に近づけるため学年や学期初め、各種体験活動では活動の見直しと学習の振り返りを行い、キャリアパスポートを活用する。	・「夢や希望をもつ児童が70%、保護者や教職員は90%以上と差がある。また、友達を褒めていると考えられている児童が多い。褒めるという行為を自分自身はしているが、相手に伝えていると捉える児童が多いので、褒める言葉や賞賛の仕方等をもっと細かく具体的に支援するようしていく。 ・夢や希望をもつ児童が87%であり、前向きに活動していることが分かる。学校でも様々な体験活動を通して自分自身に希望をもつことができる指導を行ってきたい。	B	・褒められていると考えている児童が70%、保護者や教職員は90%以上と差がある。また、友達を褒めていると考えられている児童が多い。褒めるという行為を自分自身はしているが、相手に伝えていると捉える児童が多いので、褒める言葉や賞賛の仕方等をもっと細かく具体的に支援するようしていく。 ・夢や希望をもつ児童が87%であり、前向きに活動していることが分かる。学校でも様々な体験活動を通して自分自身に希望をもつことができる指導を行ってきたい。	B	・褒められている児童の割合は、前回とあまり変わらない。児童の褒められている割合が高まるように具体的に褒める活動を継続してきたい。 ・夢や希望をもつ児童が90%増加している。様々な体験活動や学習を各学年で取り組んでいる。この活動を充実し、キャリア教育など将来のことを考える機会をもち、目標をもつて日々を過ごすことができるよう支援してきたい。	B	・先生方に褒めていただくことで児童の自己肯定感が高まっているので、家族や地域でも褒めて伸ばしていけるように心のゆとりもできていけたらと思う。 ・夢や希望をしっかりと育てる教育をさせており、とても素晴らしいと思う。
●健康・体づくり	○学校行事や遊びでたてわり活動を実施する。	○たてわり活動を充実させ、活動が楽しいと感じる児童を80%以上にする。	・月に2回程度たてわり遊びを実施し、異学年交流を行う。 ・学校行事を通してたてわり活動を行い、交流を深めたり、リーダーとしての意識を高めます。	A	・昨年度からたてわり遊びを中心としたことで100%近い児童が楽しいと答えている。積み重ねてきた成果が結果として表れているので今後も継続していく。	A	・たてわり遊びは、ほぼ100%が楽しいと感じている。計画段階から児童のリーダー性を育てるために何をどうすべきか明確にして取り組んでいるため児童も実行できたと考える。	A	・たてわり遊びを通して、横ではなく縦の学年との交流があることは素晴らしいことなので今後も継続して欲しい。	自主自立部
	●「運動習慣の改善や定着化」 ●「望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成」	●「授業以外で運動やスポーツを行う時間が1週間420分以上の児童生徒60%以上 ●「生活習慣チェック表」の各項目の○が4日/7日以上の割合の児童生徒70%以上(早寝早起きができ、歯みがきをした等)	・みんな運動することの楽しさを味わい、運動への意識が向上するように、「よかっ子オリンピック」を年2回実施する。また、昼休みに進べるボールや縄跳びを各クラスに配布し、トラブルなく楽しく遊べるようルールを設ける。 ・保健だよりや掲示物で、望ましい生活習慣について啓発をする。また、学級担任と養護教諭のTT授業で児童に直接保健指導を行うことで、自身の体への関心を高める。	・今年度も「よかっ子オリンピック」を1学期に開催し、2学期も行う予定である。また、外で遊ぶ児童も多いが、アンケートでは73%となる。この割合を少しでも増加できるように啓発を行ってきたい。 ・生活習慣や病気の予防など時期を考慮して啓発活動を行っている。生活習慣のアンケートでは「早寝・早起き・朝ごはん」に関する項目についても90%を超える成果を挙げているが、満足することなく今後も継続してきたい。	B	・今年度も「よかっ子オリンピック」を1学期に開催し、2学期も行う予定である。また、外で遊ぶ児童も多いが、アンケートでは73%となる。この割合を少しでも増加できるように啓発を行ってきたい。 ・生活習慣や病気の予防など時期を考慮して啓発活動を行っている。生活習慣のアンケートでは「早寝・早起き・朝ごはん」に関する項目についても90%を超える成果を挙げているが、満足することなく今後も継続してきたい。	B	・生活習慣や病気の予防など時期を考慮して啓発活動を行っている。生活習慣のアンケートでは「早寝・早起き・朝ごはん」に関する項目についても90%を超える成果を挙げているが、満足することなく今後も継続してきたい。	A	・外で遊ぶ時間がしっかりとれていることで体力が向上しており、心身共に健康が保たれていると思う。また、体力向上優良校に選ばれるなど体育の時間や休み時間に運動場で和気あいあいと遊んでいる中に先生方も混ざっている風景を見て素晴らしいと思う。 ・生活リズムの基本となる「早寝、早起き、朝ごはん」などの生活習慣が身に付くことが大切で、地域からも発信してきたい。
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。	・時間外勤務月45時間を常に意識するようにし、毎週金曜日の定時退勤日の推進や平日の残業時間の削減を今年度も強く勧める。 ・校内LANを活用した職員会議等の時間の10%削減。 ・主任会を月1回開催し、その中で学校全体行事だけでなく学年ごとの行事の精選を行い負担軽減を図る。	B	・45時間を意識しているが、多忙な時期が個人によって違いため今後時間を意識した行動をしていくように促す。 ・職員会議などの時間を削減するために校内LANを積極的に活用し、着実に減少している。	B	・時間外勤務月45時間を意識して取り組んでいるが、多忙な時期と共に定休や遅退に伴う欠員や副休などの人員補充ができず、校内で振り分けて行ったために負担増となり難しかった。 ・職員会議やほかの研修等もデジタル化を推進することで、データの裏で済み、改善を図ることができた。	B	・人手不足に加えて、先生の病気で欠席の状況が頻りに発生し、指導教諭までが担任を受け持っており、業務改善・働き方改革の推進以前の課題が山積している。	管理職
	○学校業務改善の推進	○管理職だけでなく学校全体で業務の改善を図るための話し合いを月1回行い、スリム化を実践する。	・主任会を月1回開催し、その中で学校全体行事だけでなく学年ごとの行事の精選を行い負担軽減を図る。	B	・今年度は主任会を月1回開催し、情報交換と行事の見直しを図っている。見直しを行ったものは、その都度反映させている。	A	・多忙な中、学年主任会を開催し、学校の現状を共有化し、改善策を講じたことができた。周知することができ、その後の運営がスムーズになった。	A	・共通理解を図ることは大切である。学校がチームとして機能するために今後も継続して欲しい。	管理職
●特別支援教育の充実	○個に応じた支援体制の確立	○個々の児童に応じた支援を行うために、全職員の共通理解を図る情報交換の場を月に1回以上設ける。	・配慮を要する児童については、計画を立てた後に1回目の指導計画を作成し、年2回見直し活用する。 ・必要に応じて支援会議を開催し、適切な対応を協議し全職員で支援していくと共に、外部機関との連携を図る。	A	・配慮を要する児童については、計画を立てた後に1回目の見直しを終えている。 ・支援会議については、その都度開催し、児童への対応策を検討して配慮すると共に、SCやSSWや外部機関と連携を取り対応策を講じている。	A	・配慮を要する児童の見直しを行うことで、現在必要な手立てや順番を変更することができた。 ・支援会議は、特別支援や不登校、問題行動を問わずその都度開催することができた。SSWやSC、外部機関を積極的に活用し、改善策を行った。	A	・配慮を要する児童に対して、細やかな指導や配慮が行われていると思った。特別支援学級に入って落ち着いた児童がいる。低学年の早い時期に対応出来たらよいと思う。	特別支援コーディネーター

●・・・果共通 ○・・・学校独自 ◎・・・志を高める教育

5 総合評価・次年度への展望	・学力は、国語科の研究を中心に言葉に大事にする学習を進めてきた。その成果として学校の学習が楽しいと考える児童が増え、CRTの結果を見ても底上げがどの学年もできた。しかし、国や県と比較するとまだまだ改善の余地があるので、今後も基礎学力の向上と共に語彙力や語彙の活用を含めた取り組みを継続してきたい。 ・児童が自他を大切に思う行動ができるように学校全体で取り組んでいるが、まずは自分が認められる存在であるように「ほめる」活動を今後も継続してきたい。「ほかほかカード」「たてわり遊び」「よかっ子オリンピック」などの他者との交流を通して自己肯定感を高めることを中心に学校全体で取り組みの継続を図る。 ・特別支援教育の充実が本校の課題である。チーム学校として児童個人の把握に努め、保護者、SSWやSC、外部機関との連携を今後も図り円滑な運用と児童の成長を促してきたい。また、通常学級にも困り感を持っている児童が数多く存在するので、保護者と密な情報交換を行い、改善を図ってきたい。
----------------	--